生徒の英語使用を高める授業
－教科書を利用したフォーカス・オン・フォームの実践を通じて－

長期研究員　吉 田　　寛

Ⅰ　研究の趣旨

学習指導要領には，英語による言語活動を授業に取り入れることによって，４技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を養う指導を行うことが明示されている。この能力の育成のためには，生徒に授業の中で実際に英語を使用させ，生徒主体の授業を生み出すことが不可欠であるが，その具体的な方法について広く共有されているとは言えない。また，言語活動中心の授業が生徒にもたらす効果について十分な検証が行われていないため，こうした授業に対して不安を抱く教員も多いと感じている。

これらの課題を解決するためには，フォーカス・オン・フォーム（以下，FonF）に基づく授業が有効ではないかと考えた。FonF は実際に英語を使用しながら語彙や文法（以下，言語形式）に注意を向かせ，言語形式への気付きを促す指導をしながら，最終的に英語を身に付けさせるアプローチである。

本研究の目的は，英語によるコミュニケーション能力を伸長させる授業への第一歩として FonF に基づく授業を実践し，「授業は英語を実際に使用する場」にするための在り方について提案をすることである。

Ⅱ　研究の概要

１　研究仮説

英語の授業において，教科書を利用した FonF に基づく授業を行えば，文法指導と言語活動を一体的に行いながら，授業の中で生徒が英語を使用する割合を高められるであろう。

２　研究の内容と実際

(1) 生徒の実態把握

研究協力校の第１学年生徒（61名）に対して英語に関する意識調査を実施した。「英語を使えるようになりたい」という質問項目で，肯定的な回答をした生徒は 73.8%だったのに対し，「授業の中で英語をもっと使ってみたい」という項目で，肯定的に答えた割合は 48.4%であった。生徒の記述から，英語を使うことへの不安や実際に使用する機会があまり与えられていないことが，この差を生み出していると考えた。

また，協力校の英語担当者への事前聞き取りでは，生徒の英語使用を促す必要性を理解しつつも，言語活動中心の授業に不安を感じていることが分かった。

これらの結果から，言語活動を取り入れた授業を行うにあたり，生徒と教員の両方に課題があることが分かった。

(2) FonF に基づく授業づくり

教科書を利用した言語活動を取り入れることによって，生徒が英語で書いたり話したりする場を生み出した。その中で生徒の意識が言語形式に向けられるのは，つまずきや誤りが生じた時である。その際に「こう使えば正しい」という気付きを促すことが教員の役割となるので，生徒の活動を注意深く観察し，必要に応じた指導を与えることにした。

(3) 授業実践

①　言語活動による本文理解

本文を理解させるためには，教科書に生徒の興味・関心を向けさせることが重要である。その手だてとして，題材に応じた言語活動（**図１**）を取り入れた。

○　グループで，キーワードを基に本文内容を推測させる。
○　個人で，本文内容に関する質問の答えに下線を引きながら読ませる。
○　グループで，ひとまとまりの英文を二つの段落に分けさせ，各段落のタイトルを考える。その根拠も話し合わせる。

図１　本文理解のための言語活動例

読む目的を明確にすることによって生徒の意識が題材に向けられ，主体的に教科書を読み，質問に対

する答えを見付け出そうとしたり，内容を読み取ろうとしたりする姿が見られた。また，ペアやグループでの活動を通じて，言語活動中心の授業へと無理なく移行することができた。

② 音読と教科書を利用したアウトプット活動

音読によって語彙の獲得や，流暢さ・正確さを促進させることを目指し，本実践では苧阪（2002）や清水（2013）のワーキングメモリ※（以下，WM）研究を参考にして，WMへの負荷が徐々に高まるような音読練習モデルを導入した（**図２**）。また音読の方法を変えることで，生徒に飽きずに取り組ませることも意図した。

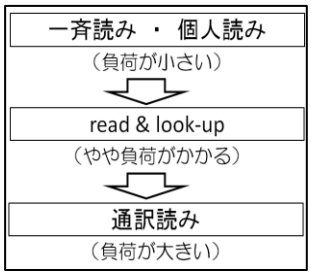

図２ 音読の流れ

教科書を利用したアウトプット活動では，各単元の教科書の英文に合わせ，キーワードを使った要約，ディクトグロス，リテリングを取り入れた。これらの活動はペアやグループで行い，生徒の英語使用に対する不安を軽減しながら，主体的に英語を使用する雰囲気づくりをめざしたものである。

言語形式に関する指導としては，生徒の観察中に多く見られた誤りに対して全体指導を与えたり，教員からの説明を必要とする箇所を生徒たちに選ばせたりした。生徒が自ら必要だと感じた部分のみを指導することで，言語形式の説明を効果的に精選することができた。また，英語を使用しながら言語形式への気付きを促すことができた。

一方，生徒も活動の中で他の生徒と自分の考えを比較しながら，自分の書いた英文や発話内容を改善しようとしていた。

※ 人間の記憶領域の一部で，言葉を使う上で重要な働きをしていると考えられている。

③ インタビュー活動

単元の最後に，４技能の総合的な育成を目指した生徒相互によるインタビュー活動を行わせた（**図３**）。インタビューをする活動と

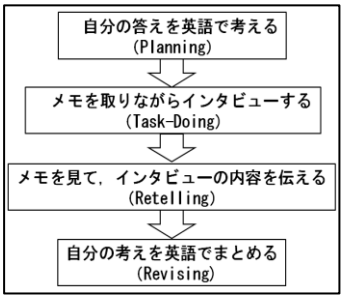

図３ 活動の流れ

メモを見ながら内容を伝える活動は，相手を代えながら行うことで，自然と繰り返し英語を使用させることをねらった。活動後の生徒の振り返りから，級友とのコミュニケーション活動そのものが，生徒にとって学習意欲を高める要因となることが確認できた。また，級友にしっかりと自分の考えを伝えようと話す速度を変えたり，相手の話す内容を深く理解しようと質問したりする姿が見られた。自分たちの表現に疑問がある時は，互いに相談しながら確認していた。

Ⅲ 研究のまとめ

１ 研究の成果

実践後に映像記録で生徒の英語使用時間を計測したところ，各授業において英語使用割合の伸長が認められた（**図４**）。また，「授業の内容が理解できた」という質問に対して肯定的な回答が，各授業を通じて80％以上であった。さらに，「授業で英語を使ってみたい」という質問に対する回答では，実践前と実践後において肯定的な答えが 47.6 ポイントも上昇した。

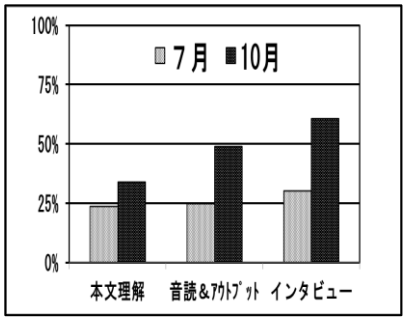

図４ 英語使用割合の変容

これらの結果は，教科書を利用した FonF に基づく授業づくりと生徒の実態に合わせた言語活動によって生徒の英語使用する割合が増加し，さらには生徒の英語学習に対する意欲向上を促すことにつながることを示唆している。

２ 今後の課題

実践結果から FonF に基づく授業は，流暢さと正確さの側面からの伸長を期待できることが示唆された。しかし，今後もより長い期間の中で，その有効性を探っていく必要がある。

また，FonF に基づいた授業に生かせる教科書を利用した言語活動の更なる開発や，その効果の検証についても継続して研究し，生徒のコミュニケーション力を育成する授業の方法を模索していきたい。